# 幼稚園教諭に必要な「動きの音楽」の表現
## －ピアノ演奏初心者が取り組む演奏法－

山　本　敬　子*

# Musical Expression in Rhythmical Movement for Kindergarten Teachers
## －Arrangement for Piano Beginners－

Keiko Yamamoto

【キーワード】幼稚園教諭，音楽表現，動きの音楽，ピアノ初心者，リメディアル教育
Kindergarten Teachers, Musical Expression, Rhythmical Movement, Piano Beginners, Remedial Education

## 1．はじめに　　ピアノのリメディアル教育が必須な現状

近年日本では 18 歳人口の減少から、学生数の確保という大問題を抱えている大学、短期大学、専門学校などが多く存在する。保育教諭養成校である大阪千代田短期大学では、「ピアノ初心者でも受験できる」をキャッチフレーズに学生数確保を展開しているため、7～8 年前から新入生のおよそ 96～98％がピアノ初心者である。その「ピアノ初心者」に対する対策として、大阪千代田短期大学では入学前に「無料ピアノレッスン」を実施しているが、同様の入学前の取り組みを実施している大阪府内の保育士養成短大、大学は HP を見る限りない。大阪千代田短期大学独自の取り組みと言えるのではないか。学会等、教員間の情報交換でも、初心者の割合は 20～60％と聞く。各校年々初心者の割合が増加してはいるが、本学は 100％に近く、バイエルに取り組む授業回数にも違いがある。

4 月の新学期から開始される授業のピアノ個人レッスン時間は、1 週間に 1 回、1 人 15 分である。集団指導の 45 分間ではオリエンテーションを含み、様々な音楽の初歩指導を行うが、個人指導 15 分という時間内で、基礎的な音楽的知識を指導しながら、初心者用教則本をカリキュラムに沿って指導していくことは、学生・指導教員双方にとって、非常に困難で時間のかかる内容となる。

そこで、入学前にリメディアル教育としての、「無料ピアノレッスン」を 4～5 回実施して

所属および連絡先
＊大阪千代田短期大学

いる。時期は 12 月～3 月で、内容は主に教則本によるピアノ個人レッスンであるが、すずやタンバリン・カスタネットなど小物打楽器を使用して合奏をすることもある。少しでも音楽的経験を重ねて、4 月からのピアノ授業進度向上を目指し、入学時に「音楽ほとんど未経験者」にならないための策であるが、そうしてもやはり、すぐに読譜できない現状は厳しく、保育の専門家として必要な音楽的能力獲得には、かなりの困難が予測される学生も存在する。

幼稚園教諭は日々の保育の中で、幼児曲とほぼ同じ回数、ピアノを使用した「動きの音楽」、「歩く」マーチ・「走る」ラン・「跳ぶ」ジャンプ・「スキップ・ギャロップ」などに取り組む現状がある。「動きの音楽」の市販楽譜は、多く存在するが、初心者が演奏可能なレベルのものは、少ないと感じることが多く、筆者は 100％楽譜に頼らない音楽の演奏法、しかも表現力の豊かな演奏法はないものかと研究してきた。今まで様々な時期・授業内で簡易伴奏による指導を実施してきたが、2016 年度卒業を控えた 2 年生を対象に、選択必修授業「器楽活用法Ⅱ」の授業内で、ピアノ実技の総復習という意味合いをも兼ねて、様々なリズム演奏を系統立てて演習し、卒時試験の対象として集中して指導した。その実践報告をここにまとめて、考察までしてみたいと考える。

## 2．研究の目的

年齢 18・19 歳以上の人間が、1 年～2 年間程度の音楽レッスン経験で、幼少期から 10 年以上の読譜経験者と同レベルでの読譜能力を獲得することは困難である。しかし、保育現場においては、子どもの動きに随時合わせることのできる、ピアノの生演奏を使用することが多い現状がある。従って幼稚園教諭養成校ではピアノ演奏の実技指導は必須であり、就職試験や、就職内定後の研修などにおいても、毎年必ずピアノ課題の指導を実施している。卒業前の半期に集中して「動きの音楽」を演習し、卒時試験として実施することは、学生が、卒業後就職して 4 月から幼稚園教諭となり、多くの課題に取り組まなければならないことの負担を少しでも軽減出来るのではないかという気持が働き実施に思い至った。

もう一つの目的は、短期大学に入学し 2 年間続くピアノ実技演奏学習のまとめとしての位置づけである。前述したように、幼児教育コース全体の 98％が初心者である大阪千代田短期大学でのピアノ授業の学習目標は、1 年次 1 年間の必修授業で教則本バイエルの修了となっているが、そこで単位認定できない学生が毎年 17～23％出ている。その中で全体の 1～6％の割合で、再履修を繰り返し、2 年間バイエルだけの練習で終わる学生がいる。

参考のために筆者が非常勤講師として 30 年間指導してきた他大学（武庫川女子大学・短期大学）の状況を記述する。最初の半期 15 回の授業では基礎としてピアノレッスンだけを実施しており、初心者を含み全員各自のレベルに沿った必須曲数を修了することが合格ラインであ

る。ここでは学習到達度が低く不合格となる学生数は、1クラス60名中1～2名程度である。ほとんどの学生が次の段階に進み、従ってバイエル使用の初心者は半年でいなくなるのである。これと同じ進度で進む学生が大阪千代田短期大学にも存在するが、1%以下の数えるほどである。ほとんどの学生が15回ではバイエルを修了できない。自主学習がなかなかできない学生が多いことが一つの原因と考える。

一方、教則本が順調に進んだ学生も、当然ではあるが楽譜がより複雑になり読譜が困難になるため、進度はなかなか上がらず、ピアノの練習から遠ざかる学生が少なくない。ここ3年間の調査では、2年生後期のピアノ実技指導では、約半数の学生が進度不足となっている。

そこで、45分間の集団指導においてピアノ演奏技術復習の意味合いを込めて簡単な楽譜をコード付けしながら多数練習していくことを実施する。演奏を長く、概ね1～2分間持続するという方法もとり、読譜しないで暗譜で演奏することを目指すことにより、指の柔軟さの訓練にもなると考えた。とにかくピアノに触れる時間を増やそうという作戦である。集団指導、45分の授業の中で、1つのテーマ、例えば「あるく」「走る」「スキップ・ギャロップ」などを決めて、どんどん弾いていく。たった1曲でも長い時間弾き続けることを目標にした。

読譜力の問題についての対応としては、1年生時から繰り返し取り組んだ馴染みのある曲を、それぞれの動きのテーマに合わせて編曲し、ほぼ暗譜で演奏することを課題とした。配布楽譜は難易度別に2～3段階の楽譜を用意し、学生が選ぶ。教員が指示と合図を出し、ある一定の時間（1分～2分）弾き続ける練習をすることにより、ピアノ演奏技術の学生各々による見極め、確認になると考えた。

卒業前の半期に集中して「動きの音楽」を演習し、卒業試験として取り組むことにより、卒業時の幼稚園教諭に求められる音楽的能力の確認、ディプロマポリシーとしての役割を持たせることを目的とする。

## 3．研究の方法

### 3－1　授業の進め方

2年生後期、卒業前の選択必修「器楽活用法Ⅱ」で実施した。この授業は、90分であるが、学生を2グループに分け、45分の集団授業と、45分内で1人15分の個人レッスンを行っている。今回「動きの音楽」を指導したのは集団指導の方である。従って学生は、集団授業45分間は「動きの音楽」の練習をし、残りの45分間の内15分でピアノ個人レッスンを受講している。また卒時試験では、弾き歌い課題をも課しているため、最後の2回授業では弾き歌い練習も実施している。全15回の集団指導の実施記録は以下の通りである。

第1回・第2回・第3回 …「歩く」マーチ曲の練習

第4回 … 個人レッスン曲のチェック

「歩く」マーチ曲の仕上げと長時間演奏の演習

第5回・第6回・第7回 …「スキップ・ギャロップ」曲の練習

第8回 … 個人レッスン曲のチェック

スキップ・ギャロップの仕上げと長時間演奏の演習

第9回・第10回・第11回 …「走る」ラン曲の練習

第12回 … 個人レッスン曲のチェック

「走る」ラン曲の仕上げと長時間演奏の演習

第13回 …「静曲」「ゆっくり歩く」「ゆりかご」

卒時試験で弾く幼児曲の弾き歌い練習（四季・梅雨　全5曲）の練習

第14回 …「ジャンプ」「かえる跳び」

卒時試験で弾く幼児曲の弾き歌い練習（四季・梅雨　全5曲）の練習

第15回 … 後期ピアノ試験リハーサル

卒時試験で弾く幼児曲の弾き歌い練習（四季・梅雨　全5曲）の練習

### 3－2　曲目について

曲目については難易度別に2、3種類の楽譜を用意した。グレード1～6（バイエル・ブルグミュラー25の練習曲）と、グレード7以上（ソナチネ以上）に分けたが、厳しくはグレードにこだわらず、弾いてみたい曲があれば自由に選んで良いという方法をとった。その際は教員による楽譜の簡易化を行った。また、もっと進んだ曲を弾いてみたい学生のために、各項目にチャレンジ曲を指定した。

ここで、参考にピアノ個人レッスンのグレード制について記述する。

| | | |
|---|---|---|
| グレード1 | 標準バイエル3～44 | 20曲 |
| グレード2 | 標準バイエル45～75 | 20曲 |
| グレード3 | 標準バイエル77～96 | 10曲 |
| グレード4 | 標準バイエル100、104、105 | 以上3曲 |
| グレード5 | ブルグミュラー25の練習曲 | 前半　4曲 |
| グレード6 | ブルグミュラー25の練習曲 | 後半　4曲 |
| グレード7 | ソナチネ　1楽章を1曲と数えて | 3曲 |
| グレード8以上 | ソナチネ・ソナタ　その他のクラシック曲 | 3曲 |

2年生の後期の学生の進度は、グレード1～13に広く分かれている。グレード1とは、まだ

バイエルの前半部分が終了していない学生で1年生時に2度不合格となった学生であり、若干名である。グレード2の学生は1年生時に1回不合格になった学生で、概ね全体の20%前後いる。グレード7以上は全体の概ね26%である。残る54%はグレード3～6で、バイエルの100番からブルグミュラー25の練習曲を練習する学生であるが、ここの段階で急に曲が難解になることもあり、多くの学生の進度が落ち、それぞれのグレードで必修曲数の合格ができない事態になっている。

**①「歩く」マーチ曲のついて**

第1回授業の「歩く」マーチ曲は、オリエンテーションも兼ねて、1年生の授業内で繰り返し練習していた曲「みつばちマーチ」「むすんでひらいて」「手を叩きましょう」を、グレードに関わらず、全員に練習させた。伴奏法は、主要三和音によるコード伴奏で、マーチにふさわしい四分音符のきざみで行う。「動きの音楽」としては、ある程度の時間（概ね2分程度）持続して演奏することを第1課題とし、その際テンポは変わらないよう電子ピアノのメトロノーム機能を使用して練習することにも取り組んだ。

暗譜が難しい学生には、曲を短くして1段目のみを繰り返し演奏することとし、時間をかけて演奏するときは、同じことの繰り返しが長く続き演奏が単調になるため、オクターブを変え、手の移動しながら演奏することを指示した。また、複数の曲を順番に演奏することも可能とし、長く弾いても単調な演奏にならないための配慮をした。第2回・第3回の「歩く」マーチ曲は、新曲「線路は続くよどこまでも」「スウェーデンマーチ」と、チャレンジ曲の「ライオンの行進」を提示した。まだ前回の曲が弾けていない学生は、第1回の課題曲を続けて練習する。第4回の仕上げでは、教員による時間合図で持続演奏と演奏の個人チェックを実施した。

**②スキップ・ギャロップ**

マーチに4回取り組んだ後は、スキップ・ギャロップという、付点リズムの曲を練習した。第5回・第6回・第7回と、易しい曲グループが「みつばちマーチ（付点編曲）」「しあわせなら手を叩こう」「うさぎとかめ」、難しい曲グループが「ごんべさんのあかちゃん」「メリーゴーランド」「木馬のスキップ」、チャレンジ曲は「ユモレスク」である。第8回仕上げでは、マーチと同様に持続演奏と演奏の個人チェックをした。

**③「走る」ランの曲**

第9回・第10回・第11回の「走る」ランは、テンポの速い曲である。ピアノ初心者にとって、テンポの速い曲は非常にハードルが高い。例えば最後まで「弾けた」曲をテンポアップすることは、試験曲など完成度の高い曲でも、全般的に余裕がなくなり、失敗が確実に増えてしまう。演奏が止まってしまい弾けなくなるなど、音楽にとって致命的なミスにもなってしまう。配布した新曲は「いとまき」「アレキサンダーマーチ」「メリーゴーランド」、チャレンジ曲が「人形の夢と目覚め、3楽章の1ページ目」である。楽譜を見て、演奏が困難と感じた学生に

は、今まで練習してきたマーチ曲・スキップ・ギャロップ曲を変化させることで対応した。この方法として、テンポを速くしてオクターブを上げて演奏位置を変化させることを指示した。新曲ではなくこの方式で再度使用した曲は、主に「みつばちマーチ」、数は少ないが「むすんでひらいて」「スウェーデンマーチ」「メリーゴーランド」「木馬のスキップ」などである。

次に左手の伴奏について述べる。「走る」ラン曲の左手の伴奏法はマーチと同様ではランの表現としてふさわしくないので、16 分音符の細かい分散和音のコード奏を指示し教員によるポイントレッスンで個人指導しながら練習した。16 分音符の細かい分散和音の演奏が出来ない学生には、マーチ同様四分音符のコード奏のまま、回数にこだわらず出来るだけ多く鍵盤を叩く、その時の音質は非常に軽く、音量は弱くし、同時にペダルを踏むことを指示した。ペダルに関しては、まだ踏んだ経験の無い学生も全体の三分の二以上いるが、初めてのペダル付けをここで練習してもらった。細かいニュアンスや手と足のバランス・コンビネーション力が必要な「連続したペダリング」ではなく、同一コード内は踏み続け、コードが変わればそれと同時にペダルも踏み替える奏法を用いることで、初めてでも演奏可能となる。ペダルを踏むことにより、「走る」時の足の映像、繰り返し足が回っている様子が表現できることを目指す。第 12 回では教員の合図による持続演奏と演奏の個人チェックを実施した。

**④第 13 回「静曲」について**

保育の中では、子ども達を沈静させる効果のある曲を演奏する場面がある。宗教のある園では礼拝の前など特に多いが、そうでなくても次の活動へ持っていくための集中時、午睡前などである。配布した新曲は「人形の夢と目覚め・第 1 楽章」「ゆりかご」「静曲」である。このカテゴリーではすべての学生が「人形の夢と目覚め」を選択した。テンポの遅い曲は、前述のテンポの速い曲ほど困難ではないが、音質としてゆっくりとした表現で演奏することは難しい。ここでは子ども達を落ち着かせる効果が求められるため、音質の表現が困難な学生は確実にテンポを遅くすることを目指し練習した。個々の感覚に頼っていては具体的な実際の速さチェックはできないので、メトロノーム機能を使い練習した。リタルダンド（段々ゆっくり）の表現は個々の音符の長さを徐々に長くしていくという方法で速度を落とすことにした。

**⑤第 14 回「ジャンプ」「かえるとび」様々な動きの表現**

新曲楽譜の配布は行わず、「みつばちマーチ」を使用した。「跳ぶ」動きを想像し、「みつばちマーチ」のメロディを、ジャンプの間隔を取り、鋭いスタカートで演奏する。左手の伴奏はコードをやはりスタカートで演奏する。変化はオクターブの上げ下げで作る方法をとった。

### 3－3　評価方法

卒時試験【音楽】で評価した。卒時試験は 2016 年度後期試験の最終日に実施した。各科目、卒業時に学生の能力をどこまで求めるのかを明確にさせることを目的とした。

以下、卒時試験【音楽】の実施要領を記す。試験は午前の理論科目と午後の演習科目に分けて行い、演習科目は音楽と体育であった。【音楽】1つ目の課題は「動きの音楽」をピアノで演奏することである。時間は1分10秒から1分30秒程度で、教員のキーボード音を合図にして曲を変更していく。曲の順番は《マーチ → ラン → マーチ → スキップ → マーチ》で、これは授業内で複数回練習している。

2つ目の課題は「弾き歌いを演奏する」ことである。学生は四季・梅雨の全5曲を自分で決め、記述したカードを予め提出しており、その中から教員が1曲指定し、前奏を付けて1番のみを歌う。卒時試験内容は「動きの音楽」「弾き歌い」の2点での評価だが、ここでは「動きの音楽」のみに着目して考察する。

### 3－4　評価の結果

評価は音楽の教員2名と他専門の教員が1名、計3人で10点満点評価をした。4名の学生についての評価が点数の差があり分かれたが、後の55名は、ほぼ揃った点数結果が出た。結果を記す。1点･･･1名、4点･･･3名、5点･･･7名、6点･･･8名、7点･･･17名、8点･･･9名、9点･･･5名、10点･･･6名であった。

演奏の状態だが、全く弾けず止まってしまう学生はなく、後期の集団授業45分を15回継続して練習したことである一定の効果は出たと考える。

## 4．結果と考察

### 4－1　授業の時期について

まず2年生の後期という実施時期について考察する。2年生の後期は教育実習、保育実習が一部の学生を除いて終了し、就職試験のピークといえる時期である。近年就職活動は7月の夏から始まることが通常となっており、学生の中には就職先が内定し安堵しているものも多い。翌年4月から社会人1年生として働く事を思えば、この時期こそ学業・演習に力を注がなければならないのだが、気持ちの緩みが目立つようになり、ピアノ実技の進度はすすまない。2年生最後の実技試験の内容が、毎年1年生に比較してよくない結果であることは、各個人レッスン担当教員をも含めて問題点として昨年までの懸案であった。後期試験とは別に、実際仕事に就いてから必要な内容のピアノ曲を、卒時試験として実施することにより、少しでも気持ちを緩めずに練習するための策である。

また、入学時から1年半ピアノレッスンを継続してきて、それぞれのグレードが上がっているため、曲の難易度が高くなっていることも大きな原因である。初心者の教則本であるバイエルを終了し、ブルグミュラー25の練習曲に進み、次はソナチネアルバムとなるが、大人から

始めた初心者にとっては、読譜のハードルが急激に高くなってくる。そこで本来は練習量を増やし次の段階まで引き上げるのだが、そうはならずピアノに触れる時間が少なくなっていく現状である。そこで、ピアノ演奏技術の復習として、集団授業の中で比較的読譜に時間を取られずにピアノを弾くことができる「動きの音楽」を取り入れることにより、演奏レベルの低下を防ぐことが出来ないかという意図であった。

もう1点、2年生後期の気持ちの緩みに関連して、就職内定者の研修課題が弾きこなせないために特別な指導時間を取らなければならないことも多くあったためである。

学生がピアノに触れる時間が増えたかどうかの検証として、確実に増えていたといえるのではないか。1つは学内での学生の練習実態を観察していての判断である。毎回45分間の集団授業内での練習量が増加したことに加え、後期試験期間から卒時試験まで授業の合間や放課後のピアノ練習室の使用量が増えている。卒時試験の結果を見ると、10点満点の上位者割合は後期試験と変わらないが、39名が6点以上というのは、今年度の実施が初回と言うことで、昨年との比較はできないが、予測していた点数よりも高い結果であった。予測の根拠は、毎回実施の授業でのチェックである。弾き歌いをも含む点数で正確な把握は出来ないが、ピアノに触れる回数の増加という点では成功しているといえるのではないか。

就職内定者の研修課題については、2016年度は1件も相談、レッスン希望が無かった。このことは学生自身が楽譜を見て取り組めた結果と判断してよいのではないか。以上の点から、この時期の実施は適切な時期であったと考える。

### 4－2　曲目について

各「動きの音楽」について、それぞれ3段階の難易度を設けて楽譜を用意したが、1番難しいチャレンジ曲は各動きでグレード7以上の学生1～2名の取り組み数しかなかった。しかしこれらは一般的な多くの曲集に掲載されている曲で、今後就職してから取り組める曲と思うので、配布したことが無駄ではないと考える。

「歩く」マーチ曲ではメロディに馴染みのある曲で、演奏も平易であったためか、比較的色々な曲への広がりがあった。実際に、実習、ボランティアなどで幼稚園教員が演奏していた曲が含まれており、幼稚園教員の演奏に合わせて動く子どもの姿を見たことがあり、動きのイメージがつかみやすかった様子である。

テンポの速い「走る」ラン曲は演奏が困難で、卒時試験では「みつばちマーチ」編曲版と右手の動きが少ない「木馬のスキップ」が多く演奏されていた。卒時試験前に教員に相談・レッスンを受講した後、自分自身で「どんぐりころころ」に決定し使用した学生もいた。グレード5以上の学生にとっては、馴染みのあるメロディが多く配布されたことから、刺激になり好みの曲を練習する姿も見られた。

### 4－3　テンポについて

ピアノに限らず、どのような楽器でも、テンポを一定に保って演奏することは大変に困難である。特に初心者の場合、演奏の「指の動き」に注意が集中し、出している音そのものを聞こえてはいるが、その内容がどういう状態であるのかを客観的には聴いていない状態である。同じ速さのつもりが、指の乱れやミスのせいで、そうはなっていないことが多い。メトロノームにそもそも合わせることが出来ない学生が多い。

「歩く」では、授業内でピアノを弾かない学生に、ピアノに合わせて実際に歩いてもらう役割を課した。学生たちには「子ども」になってもらい教室内をぐるぐる歩き続ける。ピアノ演奏者はその動きに合わせて速さを決め、左手四分音符の強い「刻み」のコード伴奏により号令をかけるように演奏する。一人で練習する場合は、メトロノームを使って練習することも効果があるが、そもそもメトロノームに合わせること自体が難しい学生もいる。実際の子どもの動きはある程度の乱れがあるものと考えられる。現実には、子どもの動きに合わせることも必要であろうが、ここではおおむね等速度運動で行った。

「走る」動きは「歩く」とは異なり、狭いML教室内で実際の動きはできないので、「走る」イメージを教員が音や言葉で示しながら伝え、演奏練習することにした。しかしマーチに比べて、指の動きがかなり速くなるため、余裕がなくなり、走っている感じの表現までは出来ない学生が多かった。教室でピアノを弾きながら、実際に子どもの体の動きをイメージしてそれに合わせる気持ちで演奏できている学生は、少なかったと思える。

卒時試験では、「歩く」マーチ曲なのに途中で緊張のせいか、かなりテンポが速くなり、次の「走る」ラン曲との差がなくなってしまっている学生や、極端に途中でテンポが変化してしまい、連続した動きの音楽として使用出来ないものも多くあった。「同じ速さを維持する」ことは学生にとって大変困難であるという結果であった。

### 4－4　表現について

「歩く」マーチ曲では、まず通常の行進練習をした。ピアノを弾く学生と歩く学生に分かれ、子どもとなって行進する学生に合わせてピアニストは演奏する。その際テンポが揺れないよう気を付ける。また左手のコード伴奏を、強くはっきりとマルカートで弾き号令の様に演奏する。この通常行進の演習の他に、チャレンジ曲の「ライオンの行進」や、オクターブを下げた「みつばちマーチ」などを使用して、ライオンやくま、ぞうなどがのっしのっしと歩いている様子を表す「ゆっくり歩き」を演習した。そこでは、特別な歩き方に対してテンポを遅くする、大きな音で動きに合わせる、など表現力が必要となってくる。頭の中にイメージができていることが重要となるが、教員がイメージ持つよう促すだけでは、困難なので実際に学生がゆっくり歩く動作をして、その動きに合わせた。

「走る」ラン曲では、ほとんどの学生がオクターブを上げて演奏する方式で練習していた。左手の動き、16 分音符の速い分散和音ができない学生も多くいて、その場合はコードのまま何度もたたく回数を増やすこと、ペダルを踏んで感じを出す等の工夫をした。マーチと並べて演奏する際、両者の違いをはっきり出すには、特にランのテンポが重要になる。ポイントは出来るだけ軽い音で、速く急いでいる感じ、足が速く動いている感じを出し、たとえそれほどのテンポの差がなくとも、両者の違いが明確に感じることができるよう表現の違いを強調して演奏することが重要である。

「スキップ・ギャロップ」では、そもそも付点音符のリズムが不得意な学生が多く、選曲の際悩んでたびたび相談を受けた。曲の難易度も、ここは他のカテゴリーと比べて高かったと感じているが、「みつばちマーチ」の付点編曲で対応するか、左手をコードではなく、さらに簡単に主音だけにするか、個々の学生のポイントレッスンをしながら、必要とされる工夫を指示していった。付点音符の曲ではないが「木馬のスキップ」と言う 8 分の 6 拍子の曲は、右手メロディの音の幅が狭く、ほとんど手の移動無しで演奏できるため、多くの学生がこれを取り上げた。卒時試験では、演奏途中で止まってしまう確率が「スキップ・ギャロップ」が一番高かった。しかし、この動きは保育の中で必修の動きであり、習得することが望まれる。弾き歌いの生活の歌、「おはよう」「おべんとう」「お帰りのうた」などもすべて付点音符のリズムである。生き生きと弾むような高揚感をもって演奏できることが必須である。

### ４－５　評価について

今回の卒時試験【音楽】では、「動きの音楽」と「幼児曲の弾き歌い」の 2 項目を合わせた形で採点した。10 点満点と言う点数方式は、他の専門である教員も入っての評価ということを鑑み、できるだけシンプルでわかりやすい評価方法を目指した結果である。学生 56 人中 4 人の学生の評価が、3 名の教員で分かれたが、それ以外はほぼ同評価であった。

「個々の学生がディプロマポリシーを確認する」という目的で行った試験であり、学生一人一人の今後の課題を明確にするという目標である。幼児教育の先生の音楽的能力としては、何が大切であり、何が必要とされるのか、また卒業時にはどの程度できていればよいのかの確認である。具体的には「ピアノ演奏を間違えても止まらずに弾く力」「子どもの反応や表情を見ながらピアノを弾く技術」「もっとピアノの練習をすること」などがある。

授業では卒時試験に備えて実際の要領に近い形で 2～3 回演習した。その際マーチとランのテンポ、表現に違いを持たせること、そして何度もよく練習し演奏途中で止まらないこと、1 つの動きの中では、テンポを変えないことなど指導した。保育教諭の役割としては、こどもたちが教員の言葉による指示なしで、どのような動きをするのか理解できるような演奏が理想である。約 10%の 10 点満点の学生は、好みのチャレンジ曲を取り上げて、テンポが速く音楽的

に非常に完成度の高い演奏まで高めた。9点〜6点68%の学生は、上記4－3、4－4で考察したテンポ・表現の点で減点があったと考えられる。評価が5点以下22%の学生は主にテンポが明確に定まらず、ミスでとまることもあるなど「動きの音楽」でありながら、どのような動きか想像できない演奏レベルであった。

## 5．おわりに

卒業すれば、幼稚園教諭としてこどもたちに幼児曲、合奏、歌唱、劇、音楽体操、ダンスなど、「表現」と呼ばれることに関わっていくこととなる。演習とは慣れるために繰り返し練習することである。続けることが必須で途切れた時点で、成長が止まってしまう。特に初心者の場合、その傾向が顕著で、夏期、冬期休暇で授業が無く楽器に触らないだけでも、読譜能力や演奏テクニックが落ちてしまう学生がいる。2年間の短期大学で、どの時期も変わらず目標に向かって努力できる枠組みを用意することが必要である。学生にとって乗り越えるべき大きな課題である実習がすべて終わった時期、特に卒業前は、安堵感もあり通常の後期試験だけでは、少々物足りないものを感じる。そこでディプロマポリシーを明確に持つことを目標とし、卒業する時には、保育教諭としてどの程度の技術・演奏能力が必要とされているのか、個々の学生の課題は何なのかを確認するために卒時試験をすることは大変意義のあることと考える。

もう1点、予測していなかった事例があった。2年生後期に保育内容「総合表現」の授業がある。全学生の70%が参加しているが、これは学生たちが教員の指導を受けながら劇を作り12月に実際の幼稚園保育園3か所で発表するというものだが、劇の音楽に「器楽活用法Ⅱ」で取り組んでいた曲が多く使用されていた。主にBGMとして、或いは走る場面で。また踊りの場面でなどである。理由として、「器楽活用法Ⅱ」では暗譜で演奏することを指示していたため、多くの学生がレパートリーとして演奏可能な曲が多かった事が考えられる。

劇の音楽に取り組めることは、卒業後、生活発表会など多くの行事がある幼稚園教員となる学生にとって学びの多い事例となった。

2年間の短期大学での音楽授業で、最大限の能力を得ることは難しいが、これから続いていく音楽の提供者であり、音楽能力の必要とされる生活の始まり、土台としての役割は果たしたのではないか。ピアノのレッスンについて考えると、教則本に沿って合格曲を増やし、着実にテクニックを得ていくことは、音楽的基礎能力獲得のためには重要である。2年間で1回15分60回のレッスン回数となるが、初心者では、曲のレベルが上がる時期が2年生後期となるため、練習量を増やし取り組まなければ次の段階には上がれないが、そこで逆に遠のいてしまう学生がいる。また10年以上のピアノレッスン経験者では、周りがほぼ初心者であることにより、学内では「もう弾けている」という間違った優越感から、やはり練習不足となっていく

学生がいる。双方とも、卒業前のまとめの時期にピアノを弾く回数が減少するため 2 年間の積み重ねがある程度消え去り、準備不足の状態で新社会人となる結果となる。今後も継続してこの「動きの音楽」指導に取り組み、幼稚園教諭のための基礎的音楽能力の向上を目指し、研究をしていく。

**＜参考文献＞**

奥田昌代，2009 年「ピアノ演奏技能向上を目指す指導上の試み－伴奏付け指導の効果についての量的分析－」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 20 号

杉山裕子，2012 年「ピアノ初心者の iPad を用いた読譜力向上に関する研究－保育者養成課程における取組による－」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 23 号

杉山裕子，2013 年「ピアノ初心者のための読譜力評価尺度作成の試み」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 24 号

三沢大樹，2014 年「保育者養成課程の学生の音楽能力に関する基礎調査」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 25 号

山本敬子，2014 年「ピアノ演奏技術向上を目指す指導上の試みとしてのアンサンブル演習－楽器演奏時における「手の動きへの集中」から「音を聴きながら弾くへの転換－『大阪千代田短期大学紀要第 43 号』

早川純子，2016 年「ピアノ表現力向上のための楽曲分析－還元分析による試み」『全国大学音楽教育学会研究紀要』第 27 号

『全訳バイエルピアノ教則本』東京：全音楽譜出版